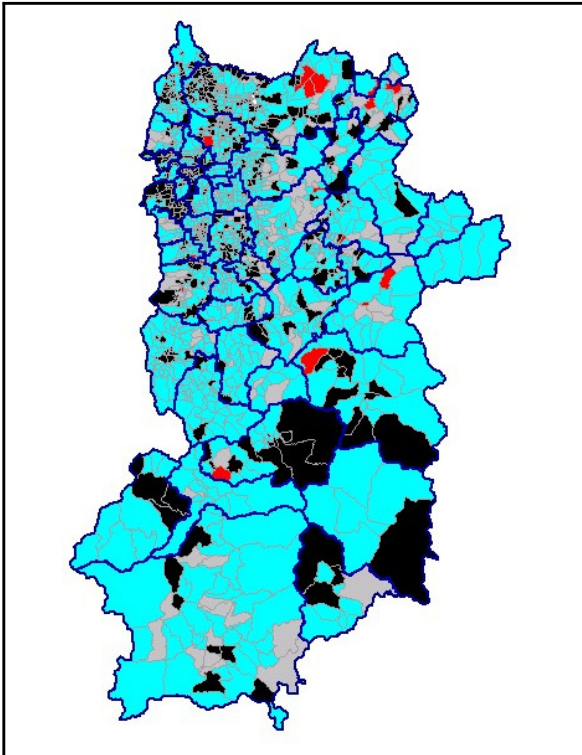


農業・林業集落アンケート調査によるヌートリアの生息状況・被害状況 (平成24年度)

1. 農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布

-平成19年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



右図は、平成19年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

農業集落でヌートリアが「いる」と回答があった場合に、「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

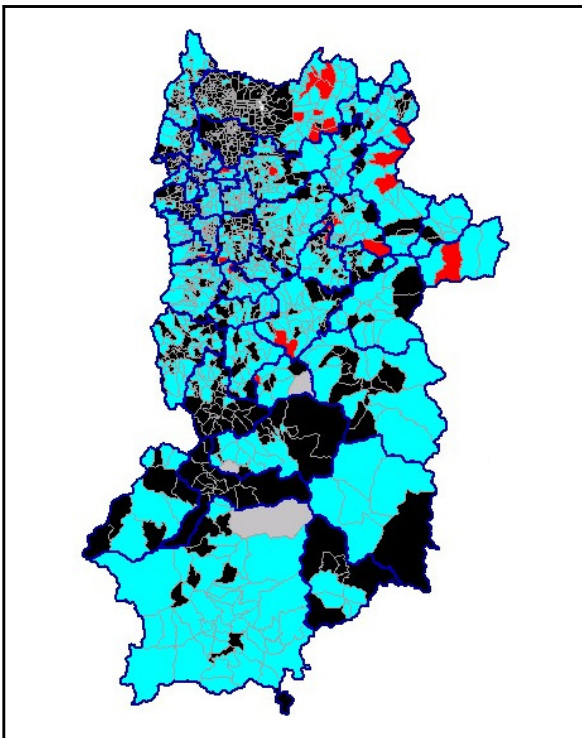
ヌートリアの分布は、非常に限定されていることがわかる。ただし、県北部から県中南部にかけて情報があり、平成19年度の時点で既に複数の流域に分布していると考えられる(可能性がある)。

平成19年度

■ いる	18集落
■ いない	863集落
■ 無回答	170集落
■ 回収無	757集落
全	1808集落

凡例 図中 青線 旧市町村界
旧市町村界内側の線 大字・地区界
 旧市町村界、大字・地区界の凡例は以降の図も同様である

-平成21年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



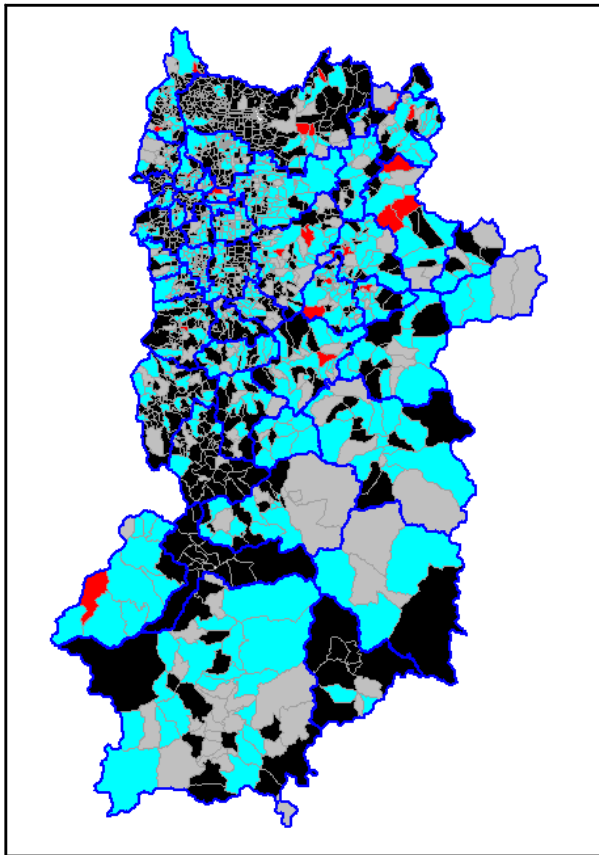
右図は、平成21年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、前年度までと比べて、県東部において広がる傾向にある。また、県中西部においても分布が見られるようになった。

平成21年度

■ いる	31集落
■ いない	753集落
■ 無回答	3集落
■ 回収無	1021集落
全	1808集落

-平成22年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



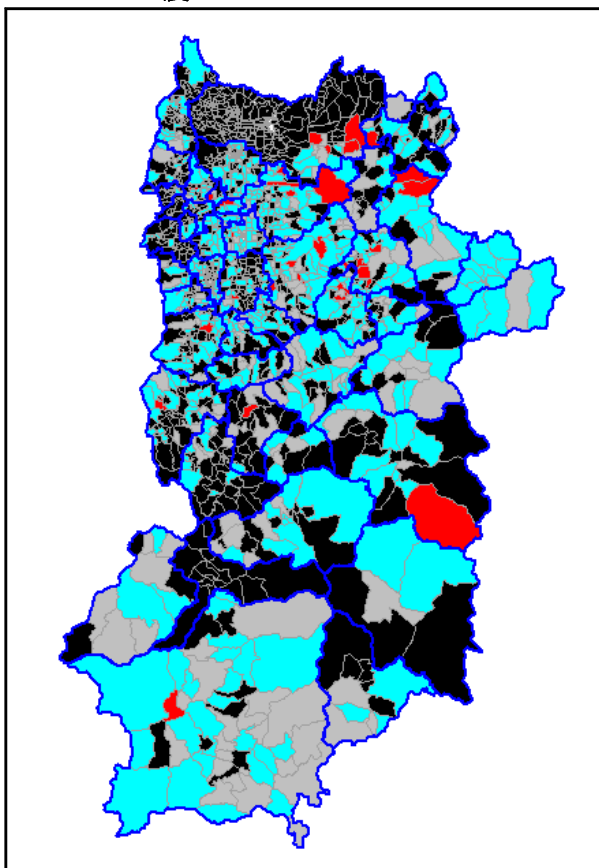
右図は、平成22年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、平成21年度と同様な傾向にあり、県北部から県東部からの情報が多い。

平成22年度

■ いる	27集落
■ いない	524集落
■ 無回答	197集落
■ 回収無	1060集落
全	1808集落

-平成23年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



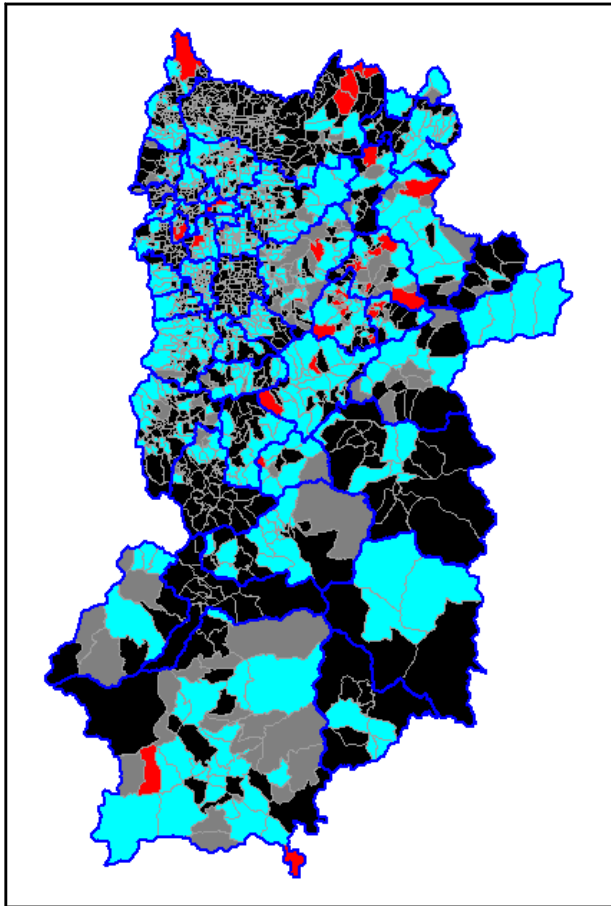
右図は、平成23年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、平成22年度と同様な傾向にあり、県北部から県東部からの情報が多い。

平成23年度

■ いる	33集落
■ いない	510集落
■ 無回答	192集落
■ 回収無	1073集落
全	1808集落

・平成24年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



右図は、平成24年度の農林業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアの生息域は、平成19年度以降、拡大する傾向にあり、県北部・中部・東部からの情報が多い。

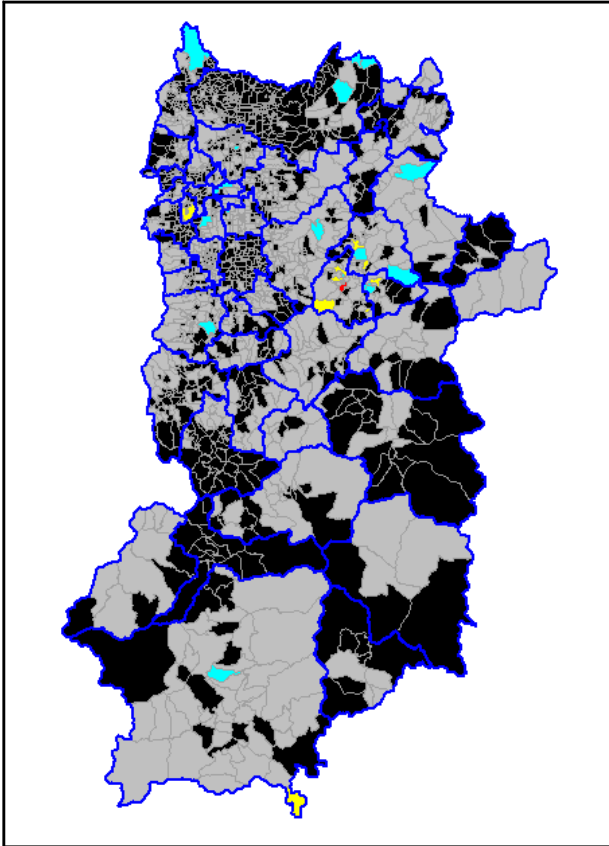
平成24年度	
■ いる	35集落
■ いない	576集落
■ 無回答	107集落
■ 回収無	1090集落
全	1808集落

後述するが、ヌートリアについては、まだ生息数、被害共に少ないため、ほとんど被害対策は実施されていないのが現状である。しかし、対応は後手に回ると、同じ外来生物のアライグマのように農業被害が増加していくことが懸念される。また、生態系への影響や治水上の影響も懸念される。

ヌートリアは本来南米に生息する動物であり、第二次大戦頃に毛皮として利用する目的で輸入され、日本各地で養殖されていた。奈良県でも過去に養殖されていたようである(過去の本調査の回答より)。

ヌートリアは本来、日本の自然界に存在するものではなく、また「外来生物法」で、「特定外来生物」に指定されているため、外来生物法の「防除計画による捕獲」等によって、生息数や生息地が拡大し被害も拡大する前に、積極的な捕獲を実施し、奈良県から排除しなければならない。

2. ヌートリアの農地への出没状況(平成24年度)



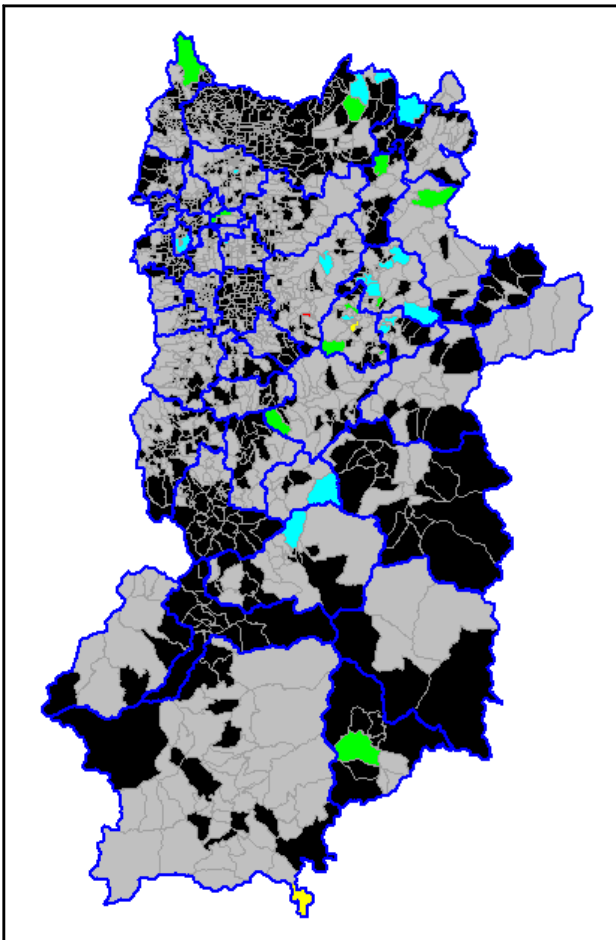
右図は平成24年度の農業集落アンケートによる、ヌートリアの農地・集落周辺への出没状況である。

「よく見る」と回答は1集落からで、現時点では前年度までと同様に、県全域の生息数はそれほど多くはないと考えられるが、今後動向には注意を要する。

平成24年度	
よく見る	1集落
たまに見る	9集落
あまり見ない	18集落
回答数	28集落

参考)平成23年度	
よく見る	5集落
たまに見る	8集落
あまり見ない	22集落
回答数	35集落

3. ヌートリアによる農業被害の大きさ(平成24年度)



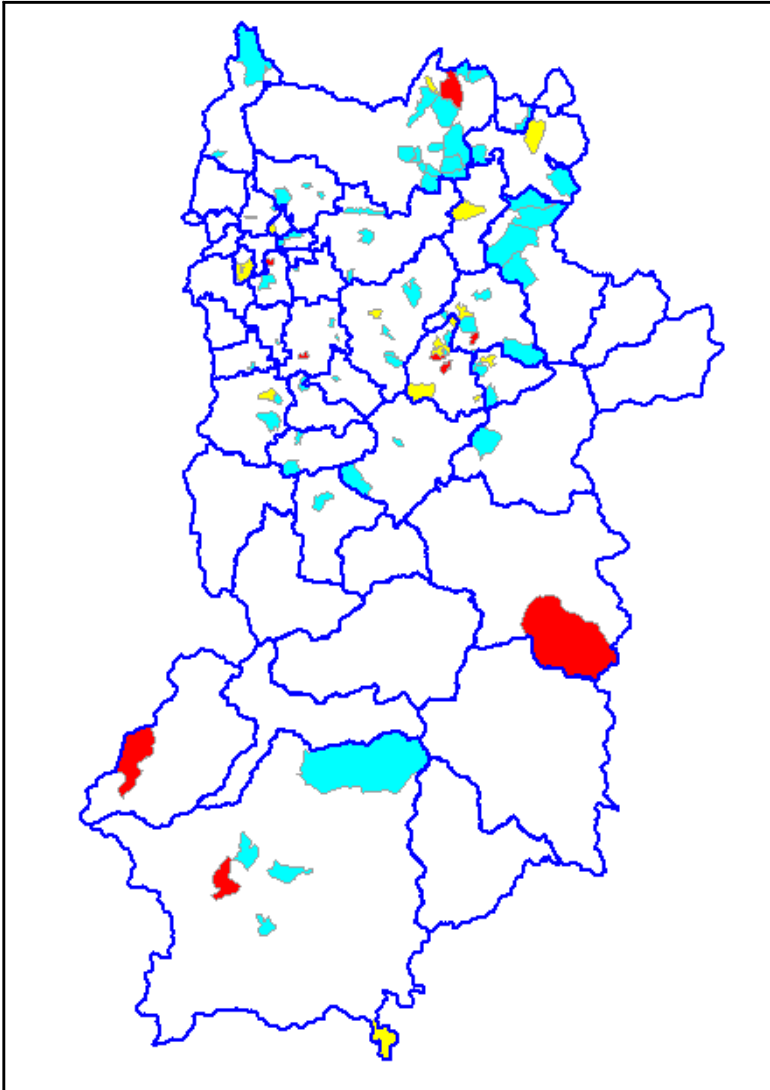
右図は平成24年度の農業集落アンケートによる、ヌートリアによる農業被害の大きさの意識調査の結果である。

ヌートリアの農業被害は、「ほとんど無い」か「軽微」なものが多い。「深刻」は本年度1件回答があった。「大きい」は2集落存在する。今後は被害の動向にも、より注意を要する。

平成24年度	
ほとんど無い	18集落
軽微	12集落
大きい(生産量の30%未満)	2集落
深刻(生産量の30%以上)	1集落
回答数	48集落

参考)平成23年度	
ほとんど無い	33集落
軽微	11集落
大きい(生産量の30%未満)	4集落
深刻(生産量の30%以上)	0集落
回答数	48集落

図 ノートリアの農地・集落周辺への出沒動向(平成20~24年度の5年間)



右図はノートリアの農地・集落周辺への出沒の5年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのノートリアの出沒を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ているが、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落に色をつけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。なお、空白は調査した5年間、ノートリアがない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

過去5年間、ノートリアの農地・集落周辺への出沒は、それほど多くないようである。しかし、一部の地域では増加傾向にあり、その近辺では生息密度が高くなっている可能性がある。

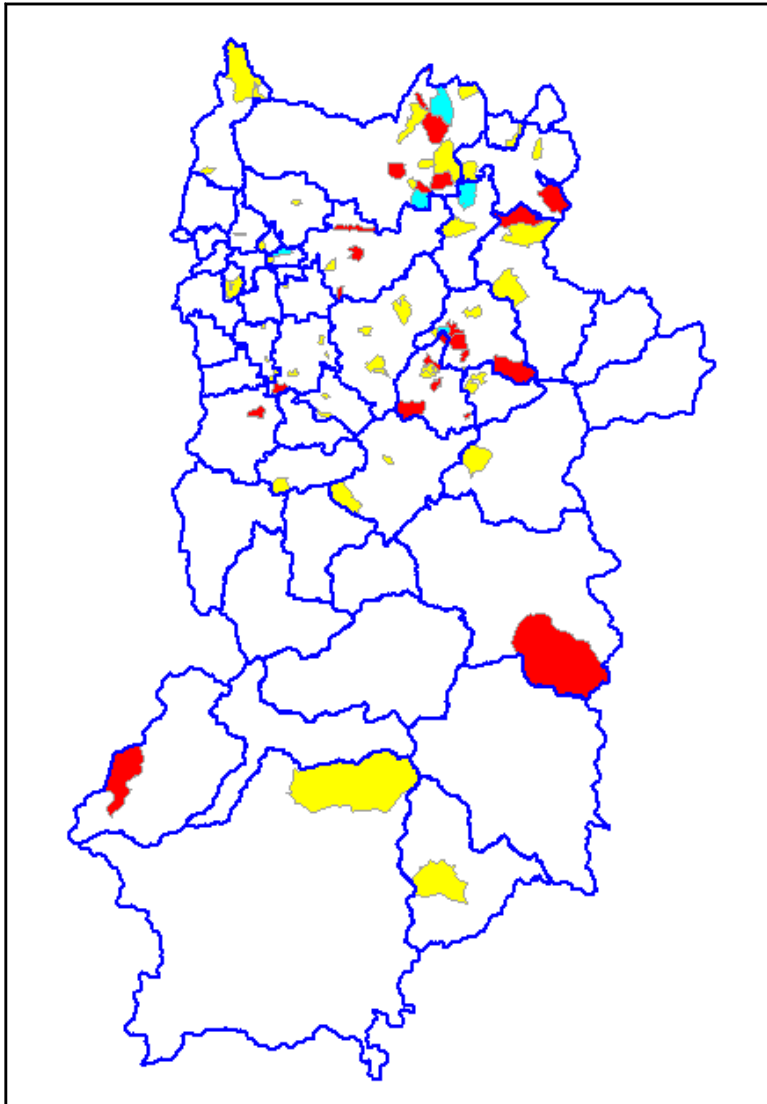
平成24年度までの5年間

よく見る	9集落
たまに見る	16集落
あまり見ない	66集落
回答数	91集落

参考)平成23年度までの5年間

よく見る	8集落
たまに見る	16集落
あまり見ない	60集落
回答数	84集落

図 ノートリアの農業被害意識の動向(平成20～24年度の5年間)



右図はノートリアによる農業被害の意識の5年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ているが、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり減った場合)は青色で各集落に色をつけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。空白は調査した5年間、ノートリアがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

ノートリアによる農業被害の意識は、回答を得た集落のうち約3分の1が増えたとなっている。減った又は変わらないは、ノートリアのこれまで生息状況から、被害はそもそも無い、あるいは元々無いとから変わっていないと解釈してよいと考えられる。したがって、県全体では被害は少ないものの、ノートリアが生息している地域では被害は増加傾向にあると考えられる。

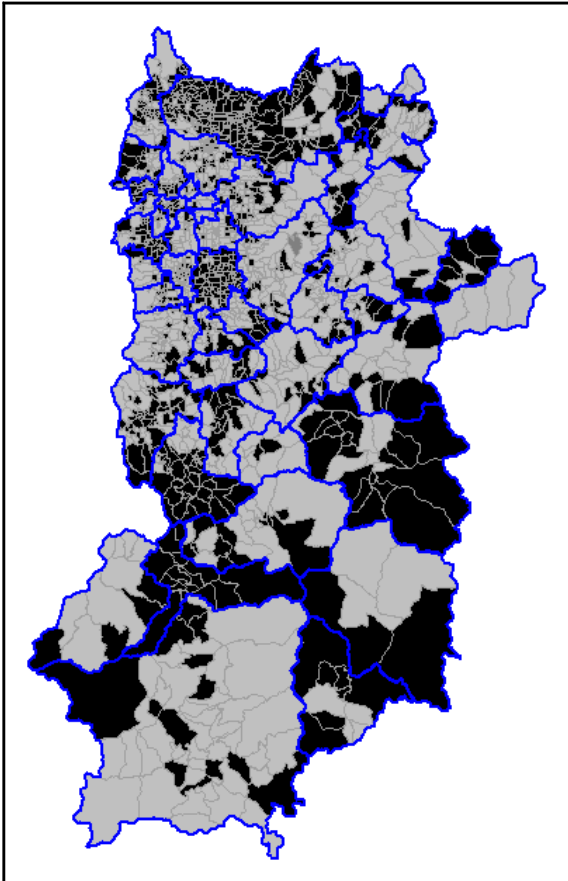
平成24年度までの5年間

■ 増えた	25集落
■ 変わらない	46集落
■ 減った	5集落
回答数	70集落

参考)平成23年度までの5年間

■ 増えた	26集落
■ 変わらない	40集落
■ 減った	4集落
回答数	70集落

図 ノートリアの被害対策 侵入防止柵の効果(農地・平成24年度)



右図は平成24年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、侵入防止柵(防護柵)の設置の効果の意識調査の結果である。

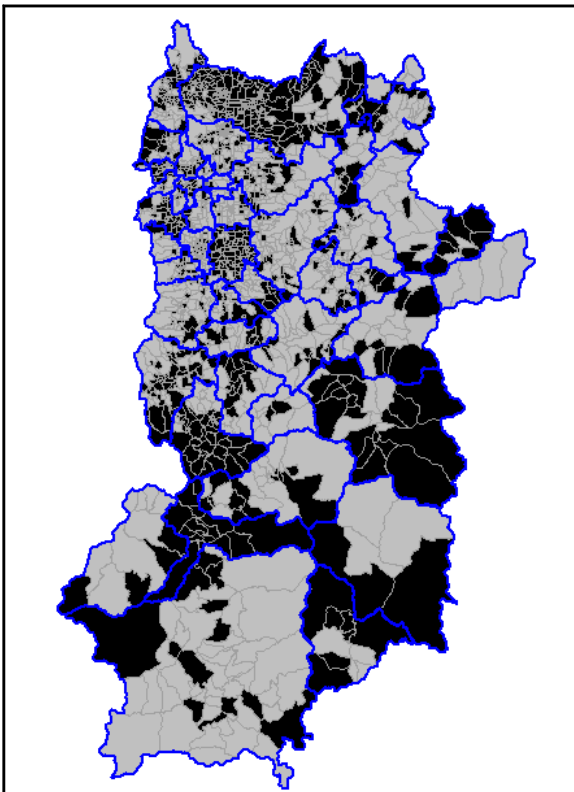
本設問の回答は無かった。

・平成24年度		
■	効果があった	0集落
■	効果がなかった	0集落
	回答数	0集落

参考)平成23年度		
■	効果があった	1集落
■	効果がなかった	2集落
	回答数	3集落

前述の被害は発生しているにもかかわらず、現状では生息数は少ないため被害対策も実施していないものと考えられる。

図 ノートリアの被害対策 有害捕獲の効果(農地・平成24年度)



右図は平成24年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

本設問の回答は無かった。

・平成24年度		
■	効果があった	0集落
■	効果がなかった	0集落
	回答数	0集落

参考)平成23年度		
■	効果があった	1集落
■	効果がなかった	1集落
	回答数	2集落

防護柵と同様に、現状では生息数は少ないため被害対策も実施していないものと考えられる。